2022/02/27 聖餐礼拝

「取って食べなさい」

マタイ２６：２６－２８

鄭 ヒムチァン

前　　奏　　BVW119 より　「天の神をほめたたえよ」
賛　　美　　讃美歌 339「悩むものよ」
祈　　祷
主の祈り

説　　教　　マタイ２６：２６－２８「取って食べなさい」

おはようございます。私たちは今日ここでともに、主イエス様が与えてくださるみことばを聞きたいと願っています。しかし、それだけではありません。今日は聖餐礼拝です。神様が私たちに差し出してくださったみことばを聞くだけではなく、実際に手にとって、飲み食べる特別なときです。この特別な恵みの時をともに喜んでうけて参りましょう。

１．導　入

一つの詩をご紹介します。八木重吉の「聖書」という詩です。スクリーンに出ますので御覧ください。

「聖　書」　八木重吉 作
この聖書（よいほん）のことばを
うちがわから　みいりたいものだ
ひとつひとつのことばを
わたしのからだの手や足や
鼻や耳や　そして眼のようにかんじたいものだ
ことばのうちがわへはいりこみたい

みことばをまるで自分の体のように感じたい。この詩はその切なる願いを語ります。聖書のみことばをただの情報ではなく、手や足、鼻や耳、自分のからだのように感じたい。このような願いを持たれたことはあるでしょうか。心から切にみことばを味わいたいという心の願いだと思います。しかし実はこの願い、主イエス様も求めておられる願いであります。イエス様は私たちにみことばを聞くだけではなく、目に見えるかたちで、さらにはそれを食べ飲むようにと差し出してくださいました。聖餐です。聖餐は私たち人が持っているすべての感覚、五感をもってみことばを受け取ることのできる神様からのめ

ぐみです。この特別なめぐみの時をともに喜んで、求めて参りましょう。

（初めての方には、この聖餐式が良く分からない儀式だと感じられるかもしれません。ですがこの聖餐式はキリスト教徒にとって非常に重要な時です。是非これから語りますその意味を理解していただけたら幸いです。）

はじめにみことばをききましょう。マタイ 26 章 26－28 節のみことばです。

■聖書朗読　マタイ 26:26－28

26　また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」
27　また、杯を取り、感謝の祈りをささげた後、こう言って彼らにお与えになった。「みな、この杯から飲みなさい。
28　これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。

歴史上、初めて行われた聖餐式の様子が記された箇所です。イエス様が十字架での死に引き渡さる前、弟子たちとともに分かち合った食事、聖餐の様子が記されています。この食事の後イエス様に待っていたことは十字架上での死でした。ですからこの食事は「最後の晩餐」とも呼ばれて有名です。そう、あと少ししたらご自分が死ぬことをイエス様はご存知で、そしてイエス様は弟子たちをこの最後の晩餐の場へと招かれたのでした。イエス様が死なれる前の最期の食事は、初めての聖餐式であったことを覚えたいと思います。

16 世紀の偉大な宗教改革者マルティン・ルターはこの史上初めての聖餐式をイエス様が死なれる前の最後の食事ということに基づいて、「主イエス様の遺言」であると述べました。遺言という観点をもってこの聖餐を説明したのです。遺言とは命の最期を迎えた人が遺された人にする約束であります。
ご自分の最期があと僅かであることを知っていたイエス様は、弟子たちを集めて、食事を通して遺言をお語りなった。つまり、受け継ぐ事柄は何か、そして受け継ぐ人は誰か。そのことを遺言として遺されたという観点で見ているのです。そしてルターは、この遺言という観点に基づいて、次の 3 つのことを問いかけました。

「①相続するものは何か　②相続する人は誰か　③遺言はいつ実行されるのか」この 3 つの点です。今日は私たちが聖餐にあずかる前に、このルターが問いかけた 3 つの点にならって、私たちが聖餐を通して受ける恵みとは何であるのかということを今一度みことばから確かめたいと思います。

２．主イエス様の遺言

① 相続するものは何か　＜遺 産＞

まずはじめに「相続するものは何か」ということです。イエス様はこの聖餐のときに何を受け継がせようされたのかということです。つまり遺産とも言えるでしょう。本日読みましたマタイ 26 章で、イエス様はこのようにお語りになりました。

マタイ 26:26,27「みな、この杯から飲みなさい。これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」

イエス様は相続するものが何であるかをおっしゃいました。それは「罪のゆるし」です。イエス様が十字架で流された血は人の罪を赦すために流された血であるのだということです。主イエス様が差し出された杯、その赤いぶどう酒、これは何であるのか。イエス様はこれは罪を赦すために流す私の血であるのだと言われました。

もう一箇所見てみましょう。ヨハネ 6:54 です。

ヨハネ 6:54「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」

このヨハネの福音書のみことばからさらに何を相続するのかがわかります。それは永遠のいのちです。主イエス様の肉を食べ、主イエス様の血を飲む者は永遠のいのちをもつ。イエス様は「わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」と言われました。それは死を超越する復活のいのちなのだと約束されているのです。

イエス様の遺言、その相続するものとは何か。罪と赦しと永遠のいのちです。もちろん聖餐から受ける恵みはこれだけはない多様な広がりを持っていますが、今日はこの罪のゆるしと永遠のいのちの２つに心に留めたいと思います。

罪のゆるしと永遠のいのち、これは「死といのち」と言い換えることもできると思います。キリストが血を流され死なれたのは、人の罪のためです。イエス様があの十字架で血を流されたのは、他の何者でもない私の罪を赦すためだったのだということです。このことを信じて聖餐にあずかる時、同時に私たちも「自らの死」を覚えるのです。何の死であるのか。それは私たちの罪の死です。古い自分、肉の自分の死です。イエス様が流された血は私たちに解放をもたらしたのです。

しかし、死んで終わるのではありません。同時にキリストの肉と血を食す時、私たちは永遠のいのちが与えられていることを覚えるのです。キリストの肉と血を食す聖餐は、私たちが霊的にキリストと一

体であることを確かに覚えるときなのです。あの主イエス様の十字架上での死は、私の罪の死であったことを思い起こし、今私は主イエス様の復活のいのちに生かされていることを確かに味わう時なのです。

②相続する人は誰か　＜相続人＞

次に２つ目、相続する人、相続人は誰かということです。本日の箇所マタイの福音書にはこう書かれています。

マタイ 26:28「これは多くの人のために、罪の赦しのために流される、わたしの契約の血です。」

「多くの人」と記されています。

一方で並行箇所であるルカの福音書には、どのように記されているでしょうか。

ルカ 22:20「 この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

「あなたがた」と記されています。

ルカの福音書には「あなたがた」と書かれてあり、マタイの福音書には「多くの人」と書かれているのです。この２つの言葉を考えたいと思います。

イエス様は「あなたがた」と言われました。あなたがたとは直接的にはその場にいた弟子たちを指しますが、同時にこの呼びかけは今この聖書のことばを読んでいる私たちに語りかけられている広がりを持っています。私たちがこの「あなたがた」というイエス様のことばを聞く時、私たちは信仰を持って私自身に語りかけられている言葉として聞くのではないでしょうか。相続者は誰なのか、それは他の誰でもない、紛れもない私自身なのだということです。

一方マタイでは「多くの人」と書かれています。一人二人の少人数ではありません。多くの人です。資格のある特定の人だけならば、私は入らなかったかもしれないのです。しかしそうではありません。イエス様は限られた一部の人にだけではない、多くの人に罪のゆるしと永遠のいのちを受け継がれたいと願われたのです。ここには主イエス様の「あなたにもこの遺産を受け継ぎたい」という切実な願いが見えるのです。

それだけではなく同時に「多くの人のため」ということばは、「私だけではない」という意味も持ちます。私以外にも多くの人がいるのです。そうです。私たちはこの聖餐を主イエス様を信じる多くの人たちとともに受けるのです。あの兄弟、あの姉妹とともに招かれ、ともに一つからだとされているのです。差し出された主の肉と血は、私の魂に罪のゆるしと永遠のいのちを確信させるだけではなく、ともに一つの教会、主のからだとされたあの人の魂にも語られているのです。

私たちは聖餐を通してともに罪赦されていることを覚えるのです。ここには罪の裁きあいはやありま

せん。誰が多く赦されたなどという比較や妬みもありません。いやできるはずないですよね。私たち一人ひとりのもっとも罪深い存在が赦されたのですから。むしろ逆です。私たちがともに赦された者たちとして喜ぶ時です。

そう。ともに喜ぶ食事の時なのです。コロナ禍でめぐみうどんが食べれなくなったり、家庭集会の持ち寄りでの楽しい食事の時、クリスマスをともに祝う愛餐会など、皆で食事をしながら喜んで祝う時が持てなくなって久しいですね。しかし、忘れないでいましょう。私たち主を信じる者たちにとって最も喜ばしい食事はいつなのか。この聖餐の時です。私たちがまことの食べ物、まことの飲み物をともに食す時、主イエス様の永遠のいのちにともに生かされていることを覚える時です。

③遺言はいつ実行されるのか　＜条 件＞

遺産は何であるか、そして相続人は誰であるかを確認しました。遺産は罪のゆるしであり、永遠のいのちであること。そして相続人は「私」であり、また一つからだとしての「私たち」です。主イエス様は最期の晩餐の席、あの聖餐の場でこのことを遺言として遺されたのです。そして私たちに今日与えられているこの聖餐の時、私たちはこのイエス様の遺言を思い起こすのです。

最期に確認したい３つ目の点です。それは「この遺言がいつ実行されるのか」ということです。言い換えると遺言が実行されるための条件は何であるのかということです。

遺言が実行されるのはいつでしょうか。それはその遺言をした人が死んだ時です。その遺言をした人が死ぬことが遺言が実行されるための条件なのです。このことは一つの事実を強烈に私たちに突きつけます。そう、私たちが今イエス様から最良のものを相続しているのは、イエス様が死なれたからなのです。私たちに与えられた罪のゆるし、永遠のいのちの恵みは、主イエス様が死ぬことによって与えられたのです。イエス様は死ぬことを通してこの遺言を実行されたのです。ご自分の死を贈り物とされたのです。イエス様がしてくださったことを改めて覚えたいのです。自分が死ぬことを誰かへの贈り物とした方がいる。それは他の誰かではなく、まさに私のためであったのです。

今日を私たちはこの聖餐を繰り返し行い、あずかっています。それは何故か、私たちのために命を差し出されたキリストの死を覚えるためです。その死によって与えられている罪のゆるしと永遠のいのちを今一度確かにするためです。あの時語られた遺言は実行されて、いま私たちはその相続にあずかっていることを私たちは主の肉としてのパン、血であるぶどう酒を食し、確かにするのです。

３．「取って食べなさい」

私のために命を捨てた方がいる。これはとてつもなく重い意味をもっています。このことを前に私たちはどんな思いになるでしょうか。「何てことをしてしまったんだ。」と思うでしょうか。「私のせいだ。私は聖餐を受ける資格などない人間だ」と思うでしょうか。しかし、もっとも大切なのは、私たちのためにご自分の命を渡された方の思いが何であるのかということでしょう。本日のみことばにおいてイエス様が語られた一つのことばに目を留めたいと思います。

26 節また、一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、神をほめたたえてこれを裂き、弟子たちに与えて言われた。「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」

「取って食べなさい。これはわたしのからだです。」
死に渡される前、これからご自分が死ぬことを明確にわかっていたこの聖餐の席で、イエス様は言われました。

「取って食べなさい」と言われたのです。自分の過ちに十分に打ちひしがれるが良いではなく、むしろ私のいのちを取って食べなさいと呼びかけておられるのです。

何という言葉でしょうか。「遠慮することはない。臆するな。罪悪感に押しつぶされるな。ただただ私はあなたに取って食べてもらいたい。私はいやいやではなく喜んであなたの罪のために血を流し、あなたがいのちを得るためにわたしのからだを喜んで差し出した。」「取って食べなさい。取りなさい。そして今あなたのうちにわたしのよって与えられている罪のゆるしと永遠のいのちを確信しなさい。」

主イエス様は私たちに取って食べなさいと招いておられます。
「取って食べなさい」私たちはこの声に従いましょう。 祈ります。

祈　り

―祈祷後 奏楽が入る、会衆は黙祷、司式者聖餐卓へ移動―

聖 餐 式

みことばから主イエス様の遺言を聞きました。受け継ぐものは何か、受け継ぐ人は誰か、何によって私たちはこれを受け継ぐのかを聞きました。これから聖餐式を執り行います。イエス様の死によって遺言が実行されたこと、そして私たちに「取って食べなさい」と言われるイエス様に言葉に応答して、この聖餐式にともにあずかりましょう。

招きの言葉

「取って食べなさい」という主イエス様の招きに不安を覚える方がいらっしゃるでしょうか。自分はふさわしくない。聖餐式に参加するためによりふさわしい状態になってから参加すべきではないかと問うておられる方がいらっしゃるでしょうか。

ですが、ルターは次のように書いています。

「もしもあなたが本当に自分の義や清さを見つめて、もはや何ものもあなたを誘惑できないような状態に至るまで努力するつもりでいるなら、あなたはいつまでたっても決して聖餐式に参加することができないでしょう。悪魔は人にその人の罪をこれみよがしに示してきます。なぜなら、悪魔は人がイエス様から離れたままでいることを望んでいるからです。聖餐式というのは、人が目を自分自身から完全に背けて、イエス様を見つめることにほかなりません。イエス様から人は、神様の子どもが生活を続け天国に入るために必要なすべてのものを、贈物としていただくのです。」

マルティン・ルター『宝石箱』より　訳：高木賢

私たち自身の状態ではなく、イエス様が与えてくださる恵みにすがり、大胆に聖餐にあずかりましょう。主イエス様が言われた「取って食べなさい」という言葉に心をとめましょう。積極的に聖餐にあずかるようにと促しておられるのです。この招きに心からの感謝をもって応答しましょう。

ですから今朝の聖餐式では「取って」食べたいと思います。実際に聖餐卓からパンとぶどう酒を取ることを考えましたが、今の時期それは難しいので、違った形で私たちの取るという応答をしましょう。

＜スライドにイメージ図を出す＞

両手を深くお椀の形にして、自分の前に差し出すことをもって取るという意思表示をしたいと思います。分餐する人が近くに参りましたら、両手をお椀型にして、自分の前に差し出してください。皆さんのその差し出した手の上にパンとぶどう酒をお渡しします。
「取って食べなさい」と招かれたイエス様の言葉を心に刻みながら、両手を差し出しましょう。

まだクリスチャンで無い方には、意味不明の儀式を強要することを避けるために、後ほど配られる、パンとぶどう酒を遠慮していただくことになります。ですが、これは皆さんを教会から追い出すことではありません。実は反対です。この儀式はまだクリスチャンで無い方々への、神様からの眼に見える招待状です。この聖餐式を見るみなさんは誰でも招かれているのです。一日でも早くこの招待状を受け取り、クリスチャンになって一緒に聖餐にあずかる日が来ることを祈ります。それではお祈りいたします。

聖別の祈り

今このパンとぶどう酒を祝し、聖別してください。御前に砕かれた心をもって、主の肉と血を受けることにより、罪のゆるしと永遠のいのちが確かであることを覚えることができますように。また私たちがキリストにあって一つであり、互いに主の家族であることを覚えて、ともに福音のあかしに生きるものとさせてください。主イエス様の御名によってお祈りいたします。アーメン

分　　餐

分餐をいたします。

奏楽「BVW75 より アリア」、分餐開始

※受餐者は両手をお椀にして差し出す。分餐者は手袋をつけ、軽く落とすようにして分餐する。

受　　餐

パンをお取りください。

今主イエスは、十字架上で裂かれたご自身の肉を差し出しておられます。これはあなた方のための私の命です。「主よ、私はあなたによって生きるのです。」そう告白して、頂きましょう。

葡萄酒をお取りください。

今主イエスは、十字架上で流されたご自分の血潮を差し出していわれます。これはあなた方の罪の赦しのために流される血潮です。「主よ、私の罪はあなたによって赦されたのです。」そう告白して、頂きましょう。

賛美・席上感謝献金　　讃美歌 332 番　「主はいのちを与えませり」

感謝祈祷　　聖餐式と献金の感謝　①矢野 光輝、②稲本 義則、③安東 孝治

（第 3 転入式・使徒信条）

紹介と報告

頌　　栄　　2022 年 テーマソング

祝　　祷

ご自分の死をもって我らの罪を赦された主イエスの恵み
一人子を惜しまず与えられた父なる神の愛
永遠のいのちに歩ませてくださる聖霊なる神の御力が
今主の招きを聞いたすべての者のうえに、豊かにとこしえまでありますように。アーメン

後　　奏　　BVW93 より「われは主を仰ぎまつり 常にわが神により頼まん」